

associe

21

アソシエ21 ニュースレター

講座開講報告(続) ●

現代中国の思想・毛沢東を読む 2

精神分析と現代思想 ラカン入門 3

現代社会主義の可能性を問う 社会主義運動史論 4

グラムシ『獄中ノート』を読む 5

研究会 J・デリダ『マルクスの亡霊』を読む 6

アソシエ21創立記念大会・海外からのメッセージ(続) ●

W・F・ハウク『ダス・ナルクメント』誌主幹 7

ベルテル・オルマン(ニューヨーク大学) 7

権利のための闘争の義務◎内田雅敏 8

インターネットで社会科学◎加藤哲郎 10

ちょっといっぶく●本の町神保町の今◎石井崇志 13

書評●『市民投票報告集 名護市民燃ゆ』安里英子 14

『季刊アソシエ』編集会議の報告 12

世話人会議の報告 15

会員の新聞書 16

No. 3
1999.7

講座開講報告

現代中国の思想・毛沢東を読む

「現代中国の思想・毛沢東を読む」は、受講者三名でスタートしました。

開講前にいちばん心配だったのは、受講者の中国語の学習歴・語学力のばらつきでしたが、全員三年以上の学習歴があり、学習意欲も高いので、当初考えていたよりもスムーズに「反対自由主義」を読み進めており、七月六日（第四回）で「反対自由主義」は読了して、「为人民服務」に進む予定です。この講座の基本的な中国語に対する姿勢は、「同文同種」的な読み方を排するという点にあります。

外国語である以上、言うまでもないことですが、同じ漢字の語彙であっても、現在の中国語での意味と、現在の日本語での意味に乖離がある場合が多いということを確認するところから出発したいので、「反対自由主義」を最初に読むことにしました。

現在の日本語に於ける「自由主義（リベラリズム）」という言葉と、毛沢東の使用している「自由主義（身勝手）都合

主義」という言葉の、「文字面の一致」と「意味上の不一致」を日本語の辞書・中国で出版された中国語辞典によって確かめる、という作業から第一回は始めました。

年間一六回の講座でどこまで読むことが出来るか。とりあえず「五篇著作」と、アンナ・ルイズ・ストロンクによるインタビューまでは読み切りたいと思っています。

第一期は中国語文法の説明にやや時間をさき、中国語中級講座的な面が強くなりましたが、受講者から第一期と第二期の間（いわゆる夏休み）に予習したいので第二・三期分の教材を先に出してくれ、という要望もあり、第二・三期はかなりスピードをあげて読め、思想内容にも踏み込んだ検討が出来るのではないかと期待しています。

講師が学部生だった頃（約三〇年前）には、中国語学演習の授業などで、毛沢東の著作は教材として普通に使用されてきました。しかし現在では毛沢東の著作を、原文で読むという講座は、どの大学にもまず無いのではないかと思われ、第二期からの受講も歓迎します。

インターネットで社会科学

加藤哲郎

「アソシエ21」の前身のひとつである「フォーラム90s」の解散にあたって、一九八九年東欧革命で脚光を浴びた「フォーラム」という組織原理が、二〇世紀末に日本及び世界でどこまで広がっているかを、インターネットのサーチ・エンジン Yahoo で調べた数字で挙げた（「フォーラム型運動の二一世紀へ」）「フォーラム90s ニューズレター」終刊号、一九九九年三月）。かつて「経済白書」や「国民生活白書」等を購入して使っていた日本の政府統計は、今では官庁のホームページで、その都度最新データを入手できる。おおむね英語版も同時に発表されるから、今メキシコのエル・コレヒオ・デ・メヒコで日本現代史を教えている大学院生たちにも、欧米はもちろんインドやロシアのネットフレンドの質問にも、電子メールでネット情報の所在を教えれば、それで済むようになった。かつて長文の手紙とコピー・ファクスをやりとりしていた頃比べれば、なんと便利になったことだろう！

こんなインターネットがらみの研究・教育に入り込んだのは、私の場合、つい二年ほど前に、ホームページ「加藤哲郎の研究室」〈<http://www.f.tijfu.or.jp/katoe/Home.html>〉を持つてからのことである。それまでもパソコン通信の Niftyserve 「思想フォーラム」を覗いたり、この道の大先輩である小倉利丸さんや山崎カラルさんのホームページを時々眺めること

はあったが、自分自身が情報発信者になり、その反響に日常的にメールで応えるようになるまでは、やはりパソコンは原稿執筆用ワープロ以上のものではなく、インターネットは趣味の世界に属するものであった。九七年夏に開設以来、私の個人ホームページへのアクセス数は、去る六月五日に通算五万ヒットに達した。常連の皆さんが更新のたびに来てくれるのだが、月に約三〇〇〇人、毎日一〇〇人以上が見ている勘定になる。

その詳しい記録は、実は先約があり、「歴史評論」九月号の「歴史学とインターネット」特集に活字で、同時にネット上の学術マガジン「Academic Resource Guide」にはリンクつきのHTMLで、「インターネットで歴史探偵——私のホームページ体験記」と題して発表されることになっている。無論それは、私のホームページ上にもアップロードされる。

私のHPでは、著書は別だが、雑誌に発表した活字論文は、原則的に三か月後にはインターネット上でも公開している。だから「大原社会問題研究所雑誌」に不定期連載している、河上肇の未発表書簡や一九二二年九月日本共産党創立綱領などモスクワで調査し集めてきた旧ソ連秘密文書日本関係史資料の紹介・解説等純学術的な研究も、インターネット上に発表している。ホームページには締切も枚数制限もないから、

「三」今「日の丸・君が代」法制化の動きがある。「天皇陛下のお治めになる御世が千年も万年も続いておさかえになりますように」(初等科修身教科書)という意味の「君が代」が(憲法の)理想の実現は根本において教育の力にまつべきものである」とした学校教育の場から放擲されたのも、これもまた当然のことであった。「君が代」の法制化、教育の場における強制、義務化はこれら削除された規定、すなわち天皇法を復活させ、「思想及び良心の自由」(憲法第十九条)を侵すものであることを理解すべきである。

さらに今、通信傍受、いわゆる盗聴法によって、憲法第二五条の保障する表現の自由、通信の秘密などの基本的人權の侵害が容認されようとしている。憲法の保障する通信の秘密の盗聴を「傍受」という名で堂々と容認しようとするのが、今般の法案である。政府は、傍受、つまり盗聴の対象となりうる犯罪を「銃器・薬物・集団密航・組織的な殺人」の四種類に絞り、傍受に当たっては、裁判所の令状発行を要件とし、かつ立会人が求められるから憲法違反ではないとする。しかし、犯罪の種類を絞り込みも、裁判所による令状チェックもこれまでの現実の運用をみればなんら意味をなさないことは明らかである。現に元検事、判事の経歴を有する野党議員からもその旨の指摘がなされている。

「四」ガイドライン関連法案が成立した五月二四日の朝日新聞朝刊が、憲法の平和原理に拘わりのない三〇代の若手議員らの言動、そしてそれを危ぶむ保守系の戦争体験世代の議

員との対比について書いている。同記事によれば、外務官僚として湾岸戦争当時、米国留学していた経歴を有する民主党の某若手議員は、憲法九条をうち捨て、世界平和のために出て行こう、と得々と演説したという。

「安保護持」「日米基軸」「米国の正義」について、いささかの疑問も持たず、植民地支配と侵略戦争という日本の近現代史における負の遺産についての歴史認識を欠き、国際政治をパワーポリティクスだけで見るとの彼らの発想に大変に危険なものを感じる。「安保護持」は、一九五二年体制、すなわち冷戦の呪縛から抜け出せない発想である。私たちは冷戦の終焉した今こそ、五二年体制でなく、一九四五年八月一五日の日本の敗戦に立ち戻って出発しなければならぬ。

基地の縮小・撤去を求める沖縄県民の闘い、明治公園に五万人が集まった5・21戦争法ストップ! 全国大集会、盗聴法反対運動に立ち上がった人々など、広範な民衆の闘いの兆しを見るとき希望がないわけではない。

東洋の哲人魯迅が希望について語った言葉が胸に染みる。

希望とはもともとあるものだとはいえないし、
ないものだとも言えない。

それは地上の道のようなものだ。

もともと地上に道はない。

歩く人が多くなればそれが道になる。

〔故郷〕竹内好訳

(弁護士)

昨年度歴史学研究会大会全体会報告「戦後日本と（アメリカ）の影」などは、「歴史学研究」九八年一〇月増刊号掲載の短文よりも、写真や図表を入れたネット上の論文の方を完全版としている。「思想」誌本年一月号の「思想の言葉 短い二〇世紀の脱神話化」執筆にあたっては、本稿と同様に海外からの電子メール寄稿であったこともあり、参考文献の代わりにホームページのURLを入れてもらい、URL引用を学術雑誌上でも「認知」してもらった。

無論、ホームページからの発信には、インターネット上のジャンク情報の山をかきわけて見いだした、社会科学情報の受信・活用が不可欠である。たとえばアントニオ・グラムシ研究の世界では、アメリカのホームページに世界中の著作・論文が蓄積され、ビブリオ・データベースが逐次更新されている。マルクス、レーニン、トロツキーらの論文も、英訳ならネット上で簡単に手に入る。昨年春シカゴのローザ・ルクセンブルグ国際会議出席のさい、ローザの日本語文庫本しか持っていないところで英語のコメントを求められ、窮余の一策でYahooで探したらちゃんと英訳が見つかって、正確に引用することができた。愛媛大学赤間道夫さんHPからは、新版MEGA挫折後の世界のマルクス研究の最前線に入ることが出来る。今春のトロツキー研究所や東京グラムシ会のホームページ発足で、日本語文献検索もずいぶん楽になった。

私の最近の研究の中心であり、ホームページの目玉である旧ソ連爾清日本人犠牲者探索やヒトラー政權獲得期在独日本

人左翼グループの研究でも、無論、モスクワのサハロフ人權センターやスタンフォード大学フーバー研究所、マンハイム大学社会史研究所などのデータを参考にしている。今春新聞で大きく報道された、一九三八年三月モスクワで爾清された無実の日本人女性「テルコ・ピリチル松田照子」の消息探索は、サハロフ人權センターが作成中の旧ソ連爾清犠牲者データベース中の日本人検索リストと、戦前特高資料等から入力した私のホームページの一九三〇年代在ソ連日本人居住者リストをつきあわせ、ホームページ上にそのデータを公表して広く情報提供を求め、それを見たご遺族から私への電子メールで身元が確認されたものであった（日本経済新聞・読売新聞二月二五日、等）。

とはいっても、インターネットは、まだ生まれたばかりの研究手段である。活字論文で参照するときの「URL」表記の様式さえ定まっていない。著作権の問題は事実上野放しのまま、無断使用覚悟で篤志家たちが研究情報を無償提供しているのが実態である。かつてエスペランティストが夢見た多数言語の世界交流は、事実上「英語帝国主義」のもとに収斂してきている。ドイツの友人たちからは、インターネット時代に入って英語論文を書かないと他国と交流できなくなつたという嘆きを聞いた。当地メキシコの大学院生たちも、スペイン語だけでは勉強にならず、どうしてもYahooに頼ってアメリカ的バイアスのかかった情報を集めてしまう。つまり、インターネットの基本構造は多極分散型・ネットワーク型にな

つていても、パソコン・ハードの値段・普及度、インターネット・マイクロソフトの市場独占・ソフト支配、電話回線・電話料の国別格差などが相乗し、結局は現実世界のグローバル市場の構造と政府の情報統制・情報操作が投影されざるをえない。まだ創生期であるからこそ、マイノリティの権利と自由を尊重し、盗聴法案のような政府の介入に歯止めをかけておくことが必要であろう。二一世紀の学術インターネットの世界ユアに確実に組み込まれるであろうインターネットの世界に、アソシエ21の同人たちも進んで介入し、ネットサーフィンで情報を集めるばかりではなく、大いに発信してほしいと願う。なお、小論は活字になり次第私のホームページにもアップロードされ、引照した各サイトに直接リンクできるようにするので、リンクでは個々のURL引用は省略する。

(E-mail: karote@fij4u.or.jp)

[See my Homepage below]

Dr. Tetsuro Karo

Hirotsubashi University

Faculty of Social Sciences

2-1 Naka, Kunitachi, Tokyo 186-8601, JAPAN

Office Phone: +81-42-580-8276

(Home) 2-16-41, Tokura, Kokubunji, Tokyo 185-0003, JAPAN

Home Phone: +81-42-327-9261

Home Fax: +81-42-327-9262

E-mail: karote@fij4u.or.jp

English Homepage URL: <http://www.fij4u.or.jp/~karote/Home.html>

<http://www.fij4u.or.jp/~karote/Home.html>

(一橋大学教員・政治学・在メキシコ)

『季刊アソシエ』

第一回編集会議の報告

アソシエ21の活動内容を会の内外に伝達する媒体として、いまのところ『季刊アソシエ』と『ニューズレター』の二つがある。後者の編集会議は随時もたれているが、六月二三日、後者の第一回編集会議が行われ、骨子が決まった。

「ニューズレター」が会議と催しの報告・予告、そして個別の記事、例えば時事的な問題解説や会員の意見・投書を幅広く掲載するのに対して、『季刊アソシエ』は、①編集方針としては、幕の内弁当のように多種多様に掲載するのではなく、一定のテーマに即した論文とエッセイ・論評・レビューを中心に据え、②ムック形式（雑誌と書籍の中間的な体裁）にする。③第一号発刊時期は一月ごろを予定している。④特集テーマに関わる原稿は、ニューズレターを活用して会員からどしどし寄せてもらう。⑤季刊の原稿料は現在の財政上では四〇〇字につき二〇〇円程度（原則として会員は原稿料なし）。⑥第一号の特集テーマはよびかけの中に含まれる諸問題から「資本主義に対抗する批判的知性」とし、編集長・伊藤誠、編集委員・足立真理子、高橋順一、的場昭弘の四名が編集を担当する。巻頭には創刊のマニフェストをつける。

(石塚正英・編集委員会・立正大学講師(非常勤))